

# 人間の魂の起源について

—ダンテとトマス—

貞 松 司

## 序

ダンテが生きていた13世紀後半には、人間の魂の起源について次のような幾つか<sup>(1)</sup>の考え方があった。

1；胎児に現われる生命の働きはその魂によるものではなく、母親の魂或いは胚種の中に存在する形成的な力による。

2；最初に内在していた自育的魂の上に、これとは別な感覺的魂という魂が加わり、さらにその上にまた別な知性的魂という魂が加わってくる。

3；最初は単に自育的にしかすぎなかったその同じ魂が、後になると胚種の中の存在にする力の働きによって感覺的でもあるように導かれる。そして最後にはこの同じ魂が知性的になるように導かれるのであるが、それは胚種の能動的な力によってではなくて、上位の能動者、すなわち外から照明する神の力によってである。そしてこのことのために、アリストテレスは知性は外から来ると言うのである。

4；自育的魂と感覺的魂とは質料の可能態から引き出されたものであるが、知性は離在し永遠な実体であり、ただ一時的に知性認識する際に人間と結びつくだけである。自育的魂と感覺的魂とは人間の実体的形相であるが、知性は全人類にとって唯一のものとなり、ただ質料だけが形相を個別化し多数化する。

以上のことを念頭に置いた上で、この小論では人間の魂の起源に関するダンテの考え方とトマスの考え方を比較し、両者の相違の原因を考察してみたい。

## I 『コンヴィヴィオ』におけるダンテの考え方

ダンテは『コンヴィヴィオ』第4論第21章で人間の魂の起源について論じている。その内容を検討すると次のようになる。

最初に男性の胚種と女性の血液であり男性の胚種が働きかける質料とが区別される。なぜならば、男性の胚種は能動的根源であるので働きかける用意ができているのに対して女性の血液は受動的根源であるので受け入れる用意ができているからである。男性の胚種は成熟し女性によって与えられた質料を準備するが、それは三つの力、すなわち生む魂の力、天体の力、およびこの二つの力の間で結ばれた諸元素の混合でありかつそれぞれの力の特性の結果から生じた複合体の力を身に帯びている限りである。これら三つの力の間には次のような関係が見い出される。<sup>(2)</sup>地上の世界の質料において徐々に実現される形相は天体の形成的な力によって引き起こされる。その過程は次のとおりである。第一の動者である神から流出した知性の光は、原動天や後続の天体を照明していく。こうして下位の世界のものすべてをアイデアとして含んでいるエンピレオから注ぐ天体の力は地上にまで達する。この天体の力が産出の原因に限定された時、胚種の複合体の中に結ばれた諸元素の力を形成する。この天体の力と胚種の複合体の中の結ばれた諸元素の力とは個別化の原因でもある。最後に天体の力は男親の魂によって引き起こされた力と結合して産出を開始するのである。これら三つの力によって胚種は成熟し、生む親の魂が与えた形成的な力を受け取るように女性によって与えられた質料を準備する。この形成的な力は生む魂の力に他ならない。この形成的な力が胎児に移されると、それは胚種の可能態から魂を現実態へと産出する天体の力へ諸器官を準備させながら胎児を形成し始める。天体の力が胚種の可能態から魂を現実態へと産出するという事は、天体の力が生む親の魂に由来する力、すなわち能動的根源から感覺的魂を産出することである。こうして感覺的魂が天体の力によって胚種の可能態から産出されるやいなや、それは天体の動者の力、すなわちすべてを動かす神から可能的知性を受け取る。従って、胚種の力と天体の力とによって産出された感覺的魂は知性を受け取る主体であることになる。

## II 『神曲』におけるダンテの考え方

次に『神曲』煉獄編第25歌の議論を見てみる。その内容をまとめると次のように

なる。

浄化された完全な血液の一部は、人間の五体を形成する形成的な力を心臓の中に獲得する。第五回目の浄化を経て、それは子宮の中に存在する女性の血液の上にしたたり落ちる。男性の胚種は女性の血液と結合してその能動的な力を働かせ始め、最初に凝結物をつくり、それから創造に不可欠な質料として凝結させたものに生命を与える。男性の胚種の中に存在する能動的な力は、最初は植物の魂に似た魂になり、さらに活動を続けてくらのげのように動いたり諸感覚を感知することができるようになる。そして最後には感覚器官を形成し始める。しかしここまでは人間の魂だけではなく非理性的な動物の魂にもあてはまる。人間の魂が非理性的な動物の魂と異なるのは次の点である。胎児において脳の組織が完成するやいなや、第一の動者である神は胎児の方を向き、このような自然の不思議なわざを喜んで、新しく創造されて力に満ちた知的魂をそこに吹き込む。するとこの知的魂は最初は自育的魂となり次には感覚的魂となった形成的な力を自己の実体の中に引き入れて、一つの魂となって生き、感じ、思惟する。このことは、太陽の熱がぶどうの木からぶどうの実の中に降りて来た果汁と合体して一つとなりぶどう酒になるのと同様である。

### III 人間の魂の起源に関するダンテの考え方

では、上の『神曲』煉獄編第25歌の内容を『コンヴィヴィオ』の内容と比較しながら人間の魂の起源に関するダンテの考え方を考察していくことにする。

アリストテレスの『動物生成論』に、「交合に基づいて生まれる完全な動物にあつては、男性の胚種のうちに能動的な力が存在している。胎児の質料は、これに対して、女性によって提供される<sup>(3)</sup>」とある。ダンテもアリストテレスに従って人間の魂の起源をそこから始める。「聖なる光の輝きと回転<sup>(4)</sup>」である天体の力が胚種の複合体を形成して、男親の魂の力すなわち形成的な力と結びつく。そしてこの形成的な力は女性によって提供された質料すなわち女性の血液 (*sanguis menstruus*) と交わり合った後、活動し始め質料を凝結させそれに生命を与える。こうして能動的根源でもある形成的な力は自育的魂となり、さらに活動を続けて現実的な感覚的魂になる。ここまでは人間も非理性的な動物も同じである。非理性的な動物の魂はここで

完成の域に達するが、人間の魂はまだ完成への途上である。人間は知性を有するので知性的魂が必要である。これは神の介入による。すなわち胚種の形成的な力が感覺的魂の現実態に達するやいなや、それに向かって第一の動者である神が「新しく創造され、力に満ちあふれた可能的知性<sup>(5)</sup>」を吹き込む。ここまでは、『コンヴィヴィオ』の内容と『神曲』煉獄編第25歌の内容とは一致する。ところが、どのようにして神によって創造された知性的魂が自然的出生を経て至った感覺的魂と結合して一つの魂になるのかという点において両者は矛盾する。『コンヴィヴィオ』においては感覺的魂が神から可能的知性を受け取ることによってであるのに対して、『神曲』においては神によって創造された可能的知性が感覺的魂を自己の実体の中に引き入れることによってである。この一見矛盾対立するように思われる両者の見解は次のように考えれば解決できるのではないか。人間においては感覺的魂と可能的知性とが本質的に異なったものとして存在しているのではない。<sup>(6)</sup>人間においては感覺的魂は最後には神の介入を経て知性的魂になるように秩序づけられている。それ故に、『コンヴィヴィオ』においては自然的出生を経て至った感覺的魂の側に重点が置かれているので、「感覺的魂は神から可能的知性を受け取る」と言うことができるのである。一方、知性は人間の魂の出生過程における究極の補充物であり、「あらゆるものは最も高貴な側面から名称される」。<sup>(7)</sup>従って、『神曲』においては神によって創造された可能的知性の側に重点が置かれているので、「可能的知性は感覺的魂を自己の実体の中に引き入れて感覺的魂が有するすべての能力を吸収する」<sup>(8)</sup>とすることができよう。それ故に、可能的知性と感覺的魂との関係は、「物を形成する動者」と「その動者によって動かされる用具」<sup>(9)</sup>との関係と同様に、現実態と可能態との関係であることになる。このことは感覺的魂と自育的魂との関係においてもあてはまる。すなわち可能態は現実態を受け取り、現実態は可能態を自己の実体の中に引き入れてそれに名称を与えるのである。このダンテの考え方にはアルベルトゥスの影響<sup>(10)</sup>があるように思われる。

こうして最初は自育的魂になり次は感覺的魂となった形成的な力は、知性の実体部分を構成するのである。ダンテはこのことを「太陽の熱がぶどうの木からぶどうの実へ降りてくる果汁と結合してぶどう酒になる」という比喩を用いて説明している。「太陽の熱がぶどうの木からぶどうの実へ降りてくる果汁と結合してぶどう酒

になる」ように、知性の光は感覺的魂を照明することによってその中に可能的知性を造り感覺的魂を知性的魂ならしめるのである。「太陽の熱」は可能的知性であるが、これは単純にして一なる知性の光が感覺的魂を照明して得られたものである。この可能的知性が自然的出生を経て至った感覺的魂と結合して人間の魂になるとダンテは言うのである。

以上のことから、ダンテは序で示した四つの考え方の第三の考え方をとっていることがわかる。

#### IV 人間の魂の起源に関するトマスの考え方

トマスは序で示した四つの考え方に対してそれぞれ次のように反論する。<sup>(11)</sup>

1；感覚や栄養摂取や成長といった生命の働きは外的根源によるのではない。

2；人間において三つの魂が存在し、その一つの魂は他の一つの魂に対して可能態において存在することになる。このことは人間の魂が唯一の実体的形相であることを否定することになる。

3；(a)人間の魂は実体的形相であるが故に「より多く・より少なく」という程度の差を受け入れない。なぜならば、数において「一」(unitas)が附加すれば別の種になるように、より大きい完全性が附加すれば別の種になるからである。従って、数的に同一である人間の魂が自育的魂、感覺的魂を経て知性的魂になるということは、同一の魂が三つの種を有することになる。このようなことは不可能である。

(b)動物の出生は質的变化のように徐々に不完全なものから完全なものへと進展していく連続的な運動ではない。なぜならば、動物の出生は栄養摂取とか成長とかに似たものではないからである。

(c)最初は単に自育的にしかすぎなかったその同じ魂が徐々に完全なものへと導かれるとすれば、先行の完全性の消滅なしに次の完全性が附加することになる。すると、後続の完全性が附加される時にはすでに先行の或る実体的形相によって魂の基体が現実的に存在していることになる。それ故に、魂は端的な意味で存在を与えるものではなくなり、実体的形相ではなくなる。このようなことは端的な意味での出生の特質に反している。

(d)(i)知性的魂が「自存的な或るもの」であるとすれば、それは前もって存在する

自育的魂や感覺的魂とは本質的に異なったものとなる。ここから一つの身体のうち  
に複数の魂を指定するようになる。

(ii)知性的魂が「自存的な或るもの」ではなくて前もって存在する自育的魂と感覺  
的魂とに対する「或る完全性」であるとすれば、身体が減じれば知性的魂も減びて  
しまうことになる。従って、両者いずれの場合も成立し得ないのである。

4；一つの知性をすべての人々に指定することになる。アヴェロエスは我々の知  
性認識が個別的に異なる理由として表象の差別を考えているが、<sup>(12)</sup>それによって個別  
的な知性認識の差別を説明することはできない。なぜならば、可能的知性の形相は  
表象から抽象された可知的形象であり表象そのものではないからである。

トマスによれば、一つのものが出生すると常に他のものは消滅する。従って人間  
や他の動物においても、より完全な形相が到来する時それよりも以前にあった形相  
は消滅する。しかし後から到来した形相はそれよりも以前にあった形相が有してい  
たよりも以上のものを有している。このような出生と消滅とを経て、人間も他の動  
物もそれぞれの究極の実体的形相にたどりつく。知性的魂は人間の出生の終局にお  
いて神によって直接創造される。この知性的魂は、自育的魂や感覺的魂といったそ  
れよりも以前の種々の形相は消滅しているにもかかわらず、自育的魂や感覺的魂な  
どが有していたよりも以上のものを有しているのである。それ故に、胚種の中に存  
在する能動的な力もダンテの言うような根源的な能動者ではない。それは自育的魂  
が内在する胎児の質料を転じて感覺的魂を抽出し、感覺的魂を現実態にまで導くの  
である。そしてその後は消滅してしまう。従って、胚種の中に存在する能動的な力  
は現実的に魂になることもなければ、胎児の五体を完成する根源的な能動者でもな  
いのである。

## V ダンテの考え方とトマスの考え方との比較

以上のことから、人間の魂の起源に関してダンテの考え方とトマスの考え方の大  
きな相違は次の二つであると言えよう。

(1)男性の胚種の中に存在する能動的な力をダンテは根源的な能動者と考えるのに  
対してトマスは用具的な能動者と考える。

(2)最初に自育的な魂がそのまま感覺的魂を経て最後には神の介入によって知性的

になるように導かれるとダンテは考えるの<sup>(13)</sup>に対して自育的魂は感覺的魂が産出された後消滅し、さらに神によって創造された人間の究極の実体的形相である知性的魂がやって来ると同時に感覺的魂は消滅するが、自育的魂と感覺的魂の能力は知性的魂が有しているとトマスは考える。

ではこのようにダンテとトマスとの考え方の異なる原因はどこにあるのか。それについて考察していこう。

トマスによれば、女性によって提供された質料のうちに最初から直ちに自育的魂が第二現実態としてではなく第一現実態として存在する<sup>(14)</sup>。そしてこの質料のうちに、胚種の中に存在していた能動的根源の力によって感覺的魂がその或る根源的な部分に関する限りにおいて産出される。この或る根源的な部分とは原罪の基体に他ならない。トマスは原罪の伝播を保護するために原罪は出生によって胎児に伝播されるとする<sup>(15)</sup>。その過程は次の通りである。生む男親の胚種の中に存在する原罪は胚種の能動的な力によって人間の性質とともに胎児に伝播され、人間の出生によって最初に触れられる魂の部分<sup>(16)</sup>が原罪の第一の基体である。原罪が胎児に伝播されれば胚種の中に存在する能動的な力は不必要なものとなり消滅してしまう。一方、女性は質料を現実的に提供しなければならないが、女性の血液は可能態における五体<sup>(17)</sup>ありしかも出生過程が形相の到来と消滅による不連続な実体的変化であることから自育的魂は胎児の質料のうちに最初から直ちに現実態として存在しなければならない。しかし、男性の胚種と交わる前は胎児の質料は自育的機能を働かせ始めないので第一現実態として存在することになる。

ところがダンテによれば、男性の胚種と女性の血液とが相交わることによって胎児の質料が提供され、胚種の中に存在していた能動的な力すなわち形成的な力はその質料に働きかけて自育的魂や感覺的魂になる。そして神によって直接創造された可能的知性に引き入れられそれとともに人間の魂という一つの実体を形成する。この形成的な力はトマスの言うような用具的な能動者ではない。しかもただ単に出生において自育的魂や感覺的魂になるだけではなく、死後の世界すなわち地獄または煉獄においても自育的魂や感覺的魂の現実態を獲得して死後の魂が生前の魂と同じ情念を味わうことを可能ならしめる<sup>(18)</sup>。このことは次のように考えれば理解できよう。下位の世界のものすべてをアイデアとして含んでいるエンピレオから注ぐ天体の

力が形成的な力と結合した時から、形成的な力はそれ自身が自育的・感覺的魂を経て可能的知性の実体となり死後地獄または煉獄において生前よりも薄くて軽い五体を形成するように秩序づけられる。それ故に、形成的な力はアウグスティヌスの言うところの種子の理性<sup>(19)</sup>と同一のものと考えられる。さらにダンテは形成的な力を胚種に固有の神的な力と考えているように思われる。なぜならば、魂が身体から解き放たれた時形成的な力は本来の形成的な力にもどるからである。

以上のことから、人間の魂の起源についてトマスは神の世界の保存と支配という観点から考察しているのに対し、ダンテは神へ至ろうとする人間の魂の高貴さという観点から考察していると言えよう。これが人間の魂の起源に関するダンテの考え方とトマスの考え方とが異なる根本原因である。

## VI 結 論

以上のことから我々は、人間の魂の起源に関するダンテの考え方の根底には、諸形相の出生は形成的な力が可能態から現実態へと進展していく連続的な運動であるとする事と、形成的な力はエンピレオから降り注ぐ天体の力によって神のアイデアを分有しそれに従って究極の目的にまで達する種子の理性であるとする二つの考え方が存在すると言うことができよう。ダンテは人間の魂の形成を出発点である自育的魂から到着点である知性的魂へ進展していく可能態から現実態へ至る漸進的な連続運動の一過程としてとらえたのに対し、トマスはそれを出発点である自育的魂からより不完全な形相の消滅と同時により完全な形相の実現を経て到着点である知性的魂に到達するという不連続な実体的変化としてとらえている。このことからダンテは自然的出生を経て成長した自育的・感覺的魂を神によって創造された知性的魂が同化して自己の実体の中に引き入れることに何の抵抗をも示さなかったように思われる。それ故に、胚種の中に存在する形成的な力は神の力を帯びたものとなり、人間の魂はその出生の最初の段階から神のもとへ帰るように秩序づけられていることになる。従って、人間の魂の起源においてダンテは神学的考察だけではなく自然的考察をも用いて人間の魂の高貴さと神へ至ろうとするその運動の力強さを証明しようとしたと言えるであろう。



## 註

- (1) Thomas, *S. T.*, I, q. 118, a. 2, ad 2 ; *ibid.*, q. 76, a. 2. 当時人間の魂の起源について他に多くの考え方もあったが、結局これら四つの考え方が主な原因となって引き出されたものにすぎないように思われる。このことは2 *Contra gent.*, cc. 86, 88, 89 からうかがい知ることができる。
- (2) Dante, *La Divina Commedia, Paradiso*, VII, 134—137. cf. Thomas, *S. T.*, I q. 115, a. 3. Albertus Magnus, *De animalibus*, XVII, tr 1, c. 7.
- (3) Arist., *De gener. animal.*, II, c. IV.
- (4) Dante, *La Divina Commedia, Paradiso*, VII, 141.
- (5) Dante, *La Divina Commedia, Purgatorio*, XXV, 72.
- (6) Thomas, *S. T.*, I, q. 76, a. 3, c.
- (7) Dante, *Convivio*, IV, VII, 11. cf. Thomas, *S. T.*, I, q. 18, a. 2, c ; *Comm. Ethic.*, 1, 9, lect. 11, n.1902.
- (8) cf. Dante, *La Divina Commedia*, a cura di Umberto Bosco e Giovanni Reggio, *Purgatorio*, Le Monnier, p. 429.
- (9) Albertus Magnus, *De nat. et orig. animae*, I, c. 4.
- (10) *Ibid.*, I, c. 6.
- (11) Thomas, *S. T.*, I, q. 118, a. 2, ad 2 ; *ibid.*, q. 76, a. 2, c.
- (12) Averroes, *De anima*, II, comm. 5.
- (13) このダンテの考え方に対するトマススの反論については次の箇所参照。*S. T.*, I, q. 118, a. 2, ad 2 ; *Contra gent.*, II, c. 89 ; *De pot.*, q. II, a. 9, ad 9.
- (14) Thomas, *S. T.*, I, q. 118, a. 1, ad 4.
- (15) Thomas, *S. T.*, I—II, q. 81, a. 1, c.
- (16) cf. Thomas, *S. T.*, I—II, q. 83, a. 1, c ; *ibid.*, a. 2, c.
- (17) Thomas *S. T.*, III, q. 31, a. 5, c.
- (18) Dante, *La Divina Commedia, Purgatorio*, XXV, 79—108.
- (19) Augustinus, *De trinitate*, III, 8, 13.

## 参 考 文 献

Dante Alighieri, *Il Convivio*, ridotto e commentato da G. Busnelli e G. Vandelli, Firenze, 1964. Bruno Nardi, *Studi di filosofia medievale*, Roma, 1979.